

コロナ禍選挙と若者の政治的社会化

ー さいたま市高校生政治意識調査(2016・17・19・21)から ー

Elections during the COVID-19 Pandemic and the Political Socialization of Youth: Opinion Surveys of Political Attitude of High School Students in Saitama City (2016, 2017, 2019, and 2021)

松本 正生

Masao Matsumoto

はじめに

1. 2021 衆院選への対応
 - (1) 高校生有権者の投票態度
 - (2) 高校生非有権者の投票志向
 - (3) 高校生と選挙過程
 - (4) 高校生の社会イメージ・情報行動
 2. 「投票した・しなかった」の弁別要素
 - (1) 親との投票体験
 - (2) 家族・友人との政治の会話
 - (3) 政治との距離感、生活満足度、政治満足度、政治家信頼度
 3. 政治意識の推移
 - (1) 選挙権・被選挙権年齢
 - (2) 政治満足度、政治家信頼度
 - (3) 政治ニュースの視聴度
 4. 政治的社会化の位相
 - (1) 時勢と加齢
 - (2) コホート比較
- まとめにかえて

〈要旨〉

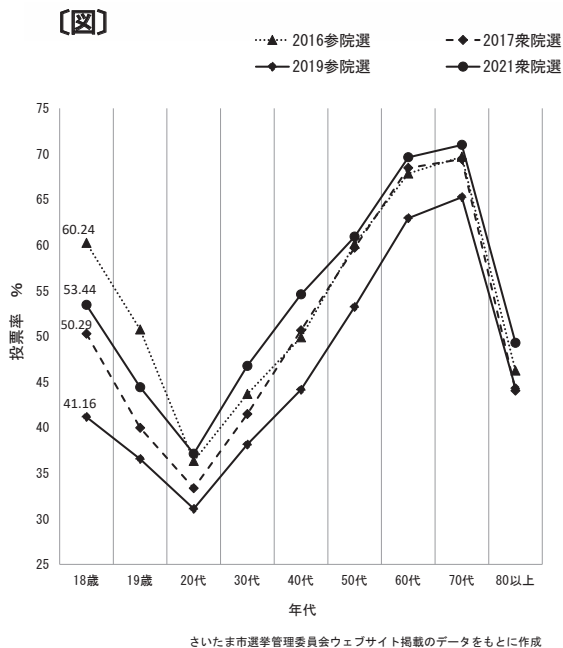
埼玉大学社会調査研究センターでは、2021 年衆院選直後の 11 月、さいたま市の市立高校生（1～3 年生：2,652 名）を対象に意識調査を実施した。市立高校生を対象とする調査は、18 歳選挙権導入後の国政選挙時、すなわち、16 年 7 月、17 年 10 月、19 年 9 月にも実施してきた。本小論では、①コロナ禍で行われた 21 年総選挙に高校生たちはどのように対応したのか、②16 年から 21 年まで、4 回の調査結果にみられる政治意識の推移、さらに、③同一対象に関する経年結果に基づく、高校生の政治的社会化の位相を、それぞれ確認する。

In November, just after the 2021 House of Representatives election, the Social Survey Research Center of Saitama University conducted a survey of the attitudes of students from city-run high schools (grades 1 to 3; 2,652 students) in Saitama City. Surveys of city-run high school students were also conducted during past national elections in July 2016, October 2017, and September 2019, since the minimum voting age was lowered to 18. In this paper, we will examine (1) how high school students responded to the 2021 general election held amid the COVID-19 pandemic, (2) the changes in political attitudes seen in the results of the four surveys conducted between 2016 and 2021, and (3) the phases of political socialization among high school students based on their responses to the same issues over time.

はじめに

2021年10月に実施された第49回衆議院議員総選挙は、投票率の全国平均が55.93%で、前回2017年の53.68%から若干の上昇をみた。18歳の投票率も51.14%(2017年は47.86%)とやや上昇した。ただ、55.93%は、戦後3番目の低率にとどまる。

〔図〕は、2016年参院選、17年衆院選、19年参院選、そして今回21年の衆院選と、18歳選挙権が導入されて以降4回の国政選挙時の、さいたま市における年齢別投票率をプロットしている。18歳選挙権導入後初の参院選を起点に、18歳の投票率は16年=60.24%、17年=50.29%、19年=41.16%と回を追うたびに大きく低下してきたが、21年は53.44%と、19年参院選を12ポイント、17年衆院選を3ポイント上回った。コロナ禍という現状をかんがみると、上昇の度合いはともかくとして、肯定的に捉えるべき傾向と言えよう。



埼玉大学社会調査研究センターでは、さいたま市教育委員会の協力により、21年衆院選直後の11月、さいたま市の市立高等学校3校(浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校)の全校生徒(1~3年生)を対象に政治意識調査を実施した(回答者総数は2,652人)。市立高校生を対象とする調査は、16年7月(参院選直後)、17年10月(衆院選直後)、19年9月(参院選後)にも実施している(注1)。本小論では、①コロナ禍で行われた21年総

選挙に高校生たちはどのように対応したのかを、②16年から21年まで、4回の調査結果にみられる政治意識の推移を、さらに、③同一対象に関する経年結果に基づき、高校生の政治的社会的位相を、それぞれ確認していきたい。

「さいたま市高校生政治意識調査2021」の調査票、および、単純集計結果については、後掲の資料を参照されたい。

1. 2021 衆院選への対応

(1) 高校生有権者の投票態度

まずは、高校生有権者が21年総選挙にどう対応したのかを確認してみよう。今回の衆院選時における高校生有権者(2011.11.1時点での満18歳以上)は514名で、3年生全体の61%に相当した。

〔表1〕を参照されたい。過去4回の国政選挙における高校生有権者の投票率(「投票した」回答の比率)は、74%(16年参院選)→64%(17年衆院選)→53%(19年参院選)→73%(21年衆院選)と推移している。衆院選と参院選とでは実施時期が異なり、高校3年生中の有権者のシェアが違うため単純な比較には留意が必要である。しかしながら、今回は、19年参院選はもちろん、同じ衆院選の17年と比較しても、比率は上回っており、16年の導入時とほぼ同様の高い値を示している。

表1. 投票したか・しなかったか(3年生有権者)

	投票した				投票しなかった			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
全体	74	64	53	73	25	36	46	26

(%)

高校生有権者の投票率は、先に掲げた〔図〕の18歳と比べると、約20ポイントもの差が存在している。試みに、同じ18歳を、市立高校生有権者—さいたま市民有権者間で比較すると、16年(高校生有権者:74%—市民有権者:60%、以下同様)、17年(64%—50%)、19年(53%—41%)、21年(73%—53%)と、過去3回は12~14ポイントであった差が、今回は20ポイントに拡大していることがわかる。高校生有権者のパフォーマンスを、評価しておきたい。

「投票した」と回答した人に「投票日当日に投票したか、期日前投票をしたか」を聞いた結果が〔表2〕である。投票日当日が占める割合は、17年(衆)および、19年(参)から10ポイント以上増

加し、88%と、18歳選挙権導入時の16年(参)に並ぶ高い値となっている。因みに、21年総選挙での、さいたま市全体の投票中に占める期日前投票の割合は26%で、17年の23%から若干上昇したが、高校生における期日前投票の割合は、逆の傾向を示している。

表2. 当日投票か・期日前投票か

	当日投票をした				期日前投票をした			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
全体	93	76	74	88	7	24	26	12

(%)

次に、「誰と投票に行ったか」の結果をまとめた〔表3〕を参照されたい。「自分1人か・家族といっしょか」にかんして、「家族と」が圧倒的なシェアを占めている。とりわけ男性における比率が、17年(衆)60%→19年(参)70%→21年(衆)76%と直線的に増加したことにより、「家族連れ投票」は、高校生の投票行動としてすっかり定番となったと言えるだろう。

表3. 誰と投票に行ったか

	1人で			家族と		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	38	28	23	60	70	76
女性	12	12	13	87	88	85
全体	25	19	18	74	80	80

(%)

今度は、高校生有権者のうち、「投票しなかった」人たち(21年は26%)に焦点を当ててみたい。「投票しなかった理由」を2つまで選んでもらった結果が、〔表4〕である。経年の推移にかんしては、「他の用事(勉強や部活など)があったから」が多数を占める傾向に変化はみられない。その他の理由を

表4. 投票しなかった理由(2つまで)

	2016	2017	2019	2021
他の用事(勉強や部活など)があったから	54	67	56	67
病気や体調不良	4	8	2	7
面倒だったから	8	12	19	11
選挙に関心がなかったから	8	9	16	7
誰(どの政党)を選んでいいのかわからなかったから	17	32	40	20

(%)

みると、「誰(どの政党)を選んでいいのかわからなかったから」や「面倒だから」、「選挙に関心がなかったから」など、17年(衆)から19年(参)へと増加してきた回答の比率が、21年(衆)においてはいずれも顕著に減少している。「投票した」・「投票しなかった」にかかわらず、高校生の意識や態度が、地に足が付いてきたようにも思われる。コロナ禍ゆえの現象なのだろうか。

(2) 高校生非有権者の投票志向

非有権者の高校生たちは、選挙についてどう受け止めているのだろうか。今回の調査対象の1年生～3年生全体(2,652人)のうち、18歳未満(2021年11月1日現在)の非有権者は2,138人で81%を占めた。うち、3年生非有権者は329人であった。

非有権者高校生に「18歳になったら選挙の投票に行くか」を聞いた結果を〔表5〕にまとめた。「(投票に行く)」は64%と、これまでの4回中最も高い比率となった。とくに、1、2年生で6割以上に上昇したことが注目される。投票志向の上昇は、選挙や政治に対する関心の高まりを示しているのだろうか。

表5. 18歳になったら投票に行くか(非有権者)

	行く				行かない				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	59	59	56	62	4	6	4	3	33	33	38	33
女性	63	59	57	65	2	3	3	2	31	37	38	31
1年生	57	53	53	62	2	3	3	3	34	42	41	34
2年生	59	56	54	61	3	6	3	3	35	36	39	34
3年生	72	80	63	76	3	2	3	2	24	16	33	22
全体	61	59	56	64	3	4	3	3	32	35	38	32

(%)

(3) 高校生と選挙過程

ここからは、高校生全体について、これまでの選挙で見聞きしてきたもの、また、高校生が政治や選挙に関心を持つには、および、投票に行くようになるには何が必要かなど、彼ら自身の認識を確認してみよう。

〔表6〕は、21年総選挙をはじめとして、各回の国政選挙で「見たり聞いたりしたもの」をすべてあげてもらった結果を示している。常に大きな割合を占める事項については、例えば、「選挙カーの連呼運動」、「掲示板にはられた候補者や政党のポスター」、「候補者や政党による駅や街頭での演説」などのように、衆院選時と参院選時の間でその比率に相違が見受けられるものが存在する。他方、「新聞やテレビの選挙報道番組」、「政党のテレ

ビ・コマーシャル」、「候補者や政党の新聞広告」など、衆・参の相違に加えて、同じ衆院選の17年と21年との間の相違を、言い換えれば減少傾向を確認できる事項も存在する。これらの結果は、高校生にみられる特性というよりも、マス・メディアの報道や政党や政治家の選挙運動など、時宜の選挙過程の状況と関連している。高校生の態度や行動は、社会のあり様と直結している。

表 6. 衆院選で見聞きしたもの

	2016	2017	2019	2021
「選挙公報」	26	32	28	31
候補者や政党の新聞広告	26	29	21	23
政党やテレビCM（コマーシャル）	35	49	30	42
新聞やテレビの選挙報道番組	53	67	41	53
政党や選挙のホームページ	4	4	6	5
LINEやTwitterなどのSNS	22	25	23	25
YouTubeなどの動画サイト			18	17
掲示板にはられた候補者や政党のポスター	51	60	57	61
候補者や政党のによる駅や街頭での演説	45	60	48	56
候補者や政党のビラやパンフレット	19	23	20	24
インターネットのポータルマッチ	4	2	2	4
選挙カーの連呼運動	47	66	58	65
どれも見たり聞いたりしなかった	2	2	6	3

(%)

次は、「高校生が政治や選挙に関心を持つためには何をすればよいか」を2つまで選んでもらった結果をみてみよう。[表7]を参照されたい。4回の調査を通じて、「学校で政治や選挙に関する新聞記事を使った授業を受ける」、「学校で政治や選挙に関する話し合いやディベートを行う」、「議員や政党の関係者に来てもらって政治の話聞く」などが比較的高い比率を占めている。

経年の変化に注目すると、「学校で選挙管理委員会の職員などから選挙の話の聞いたり、模擬選挙

表 7. 高校生が政治や選挙に関心を持つためには

	2016	2017	2019	2021
学校で政治や選挙に関する新聞記事を使った授業を受ける	34	34	28	33
学校で政治や選挙に関する話し合いやディベートを行う	26	24	26	34
議員や政党の関係者に来てもらって政治の話聞く	27	26	25	28
学校で選挙管理委員会の職員などから選挙の話の聞いたり、模擬選挙を体験する	9	16	21	24
選挙時に、投票所で受付などの事務を体験したり、街頭で投票への参加を呼びかける啓発キャンペーンに参加する	15	9	7	10
開会中の議事を傍聴に行く	6	17	20	10
本物の議場で生徒が市長に質問したり提案を行う高校生議会を開催する	17	4	9	11
その他	4	4	4	4
わからない	14	15	13	

(%)

を体験する」が顕著な増加傾向を示していることがわかる。また、「学校で政治や選挙に関する話し合いやディベートを行う」も今回は34%と第一位に増加している。模擬選挙やディベートなど、学校現場での広がりを反映しているのだろうか。

選挙に関して、「どのような環境であれば投票しやすいか」(2つまで)を聞いた結果は、[表8]にまとめた。回答は、「スマートフォンやパソコンから投票できる」と「自分の通う学校で投票できる」の二つに集中している。彼らの投票への志向性や選挙への関心が高まったとしても、投票環境自体は「スマホか学校で」と、あくまで彼らの日常生活に寄り添う必要があるように思われる。

表 8. どのような環境ならば投票しやすいか

	2016	2017	2019	2021
自分の通う学校で投票できる	53	47	46	53
自分がよく行く施設や店で投票できる	21	23	24	26
全国どこでも投票所でも投票できる	20	15	16	11
朝早くから深夜まで投票できる	18	15	15	15
郵便で投票できる	4	6	7	9
スマートフォンやパソコンから投票できる	51	63	61	64
その他	1	1	-	0

(%)

(4) 高校生の社会イメージ・情報行動

さて、21年調査では、単発のトピック質問をいくつか採用している。具体的には、コロナ禍の現状をふまえて、コロナ感染拡大の責任にかんする認識を聞いている。「新型コロナウイルスの感染がここまで拡大したこと」について、三つの選択肢からいずれか1つの選択を求めた結果が、[表9]である。すべての学年に共通して「感染対策を守らない人たちが悪い」が最も多く、次いで「新しいウイルスなので仕方ない」、「行政の責任が重い」の順となっている。行政側の責任だという認識の低さからして、コロナ禍の現状を受動的に捉えていることがうかがわれる。

表 9. コロナ感染拡大の責任

	行政の責任が重い	感染対策を守らない人たちが悪い	新しいウイルスなので仕方ない
男性	24	40	36
女性	25	43	32
1年生	24	46	31
2年生	27	38	35
3年生	23	40	36
全体	25	41	34

(%)

さらに、日本の将来展望、つまり、「日本の将来はどうなると思うか」にかんしては、「変わらないと思う」が多数を占めている（〔表 10〕）。「わからない」も含め、彼らの現状維持志向を示しているように思われる。

表 10. 日本の将来どうなる

	良くなる と思う	あまり変わら ないと思う	悪くなる と思う	わからない
男性	9	51	26	13
女性	6	66	16	12
1年生	8	60	18	13
2年生	9	54	25	13
3年生	6	60	23	11
全体	7	58	22	12

(%)

今回の調査では、情報源に関する質問を過去 3 回とは大幅に変更している。〔表 11〕を参照されたい。「自分の携帯やタブレットで、社会や政治のニュースの情報源としてよく利用するもの」を 1 つだけ選んでもらった結果を示している。「LINE ニュース」=28%、「ニュースアプリ (Yahoo! ニュース、スマートニュース、グノシーなど)」=25%、「Twitter」=23%にほぼ三分されている。

表 11. 情報源

	Twitter	LINE ニュース	Youtube内の ニュース動画	ニュースアプリ
男性	21	20	11	29
女性	23	36	5	21
1年生	22	25	9	26
2年生	26	27	9	24
3年生	21	32	7	26
全体	23	28	8	25
	新聞社の動画 ニュースサイト	テレビ局の動画 ニュースサイト	動画 サービス	その他
男性	2	4	0	2
女性	1	3	0	2
1年生	2	4	0	2
2年生	1	4	0	2
3年生	1	3	0	2
全体	2	4	0	2

(%)

一方、上記の情報源のうち「信頼する情報源はどれか」を問うと、〔表 12〕のようになる。すなわち、「ニュースアプリ」が 44%で突出して高い。情報源としてはわずか 2%、4%にとどまっていた「テレビ局の動画ニュースサイト」や「新聞社の動画ニュースサイト」などが、それぞれ 27%、23%にのぼっている。なお、その他(回答比率 6%)欄への書き込みを確認すると、「(信頼できるものは)ない」という記入が非常に多かった。これらの結

果は、情報に対する冷静さを示唆しているのか、それとも情報源に対する懐疑心を示唆するのか、なんとも判然としない。

表 12. 信頼する情報源

	Twitter	LINEニュース	Youtube内の ニュース動画	ニュースアプリ
男性	13	24	15	43
女性	9	29	7	45
1年生	13	27	13	47
2年生	12	27	11	43
3年生	9	25	9	42
全体	11	26	11	44
	新聞社の動画 ニュースサイト	テレビ局の動画 ニュースサイト	動画サービス	その他
男性	21	23	2	6
女性	27	30	2	5
1年生	26	31	3	6
2年生	22	24	2	5
3年生	22	25	1	7
全体	23	27	2	6

(%)

2. 「投票した・しなかった」の弁別要素

(1) 親との投票体験

ここからは、高校生有権者にかんして、「投票した」か「しなかった」かを弁別する要素を確認してみよう。

過去の調査結果から得られた知見として、投票の動機づけと相関の高い要素が、親および家族の役割にほかならない。まず、「子どものころ、親といっしょに投票所に行ったことがあるか」との関係を取り上げたい。親との投票所体験の有・無の経年比率は、16年=47% (ある)-44% (ない) : 以下同じ、17年=50%-38%、19年=51%-38%、21年=49%-39%と、大きな変化はみられない。

〔表 13〕は、「投票した・しなかった」と親との投票所体験とのクロス集計結果を、まとめたものである。親との投票所体験の有無について、「投票した」-「投票しなかった」間で、「投票した」=「ある」が多数、「投票しなかった」=「ない」が多数と大小関係が逆転している。

表 13. 「投票したか」×「親との投票所体験」

	ある		ない		わからない	
	2019	2021	2019	2021	2019	2021
投票した	51	53	38	35	11	10
投票しなかった	39	35	52	48	10	16

(%)

(2) 家族・友人との政治の会話

今回は、家族と政治の話をする頻度を取り上げたい。家族との政治の割合は、16年=45%（「よくある」+「ときどきある」）-49%（「あまりない」+「ほとんどない」：以下同じ）、17年=51%-48%、19年=44%-56%、21年=58%-41%と推移しており、「ある」派の比率は21年に最高値に上昇している。19年と21年との間で、大小関係の逆転も生じている。

〔表14〕は、「投票した・しなかった」と家族と政治の話をする頻度とのクロス結果を示している。やはり、親との投票所体験と同様の傾向が存在する。「よくある」+「ときどきある」を「ある」、「あまりない」+「ほとんどない」を「ない」として経年の大小関係を集計し直すと、「投票した」：17年=65%（ある）-36%（ない）以下同じ、19年=51%-49%、21年=65%-34%、「投票しなかった」：17年=44%-56%、19年=35%-65%、21年=39%-60%と、一貫して「投票した」は「（家族と政治の話を）する」傾向が高く、「投票しなかった」は逆に「しない」傾向が高いというラベリングが可能となる。投票行動にかんする家庭環境の比重は大きい。

表14. 「投票したか」×「家族と政治の話をするか」

	よくある				ときどきある			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
投票した	11	13	12	16	42	52	39	49
投票しなかった	8	3	2	10	33	41	33	29
	あまりない				ほとんどない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
投票した	17	27	29	22	21	9	20	12
投票しなかった	21	27	30	35	33	29	35	25

(%)

家族に次いで、「友人との政治の話」と「投票した・しなかった」との関係を見てみよう。家族とは異なり、友人と政治の話をする割合はもともと低く、16年=17%（「よくある」+「ときどきある」）-77%（「あまりない」+「ほとんどない」：以下同じ）、17年=19%-80%、19年=16%-84%、21年=27%-71%と推移している。21年に「ある」の比率が上昇したものの、「ない」の割合が圧倒的多数を占め続けている。〔表15〕を参照されたい。「あまり」と「ほとんど」を合計した「しない」の比率は、16年が「投票した」派=76%・「しなかった」

表15. 「投票したか」×「友人と政治の話をするか」

	よくある				ときどきある			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
投票した	-	4	2	6	17	29	18	24
投票しなかった	-	1	3	6	17	22	12	14
	あまりない				ほとんどない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
投票した	32	28	33	36	44	39	47	33
投票しなかった	33	30	24	37	46	47	61	43

(%)

派=79%（以下同じ）、17年が67%・77%、19年が80%・85%、21年が69%・80%と、各年の値に若干の相違が存在するものの、友人との政治の話を有・無が「投票する・しない」の弁別要素となっているという推測は、成り立ちにくい。

(3) 政治との距離感、生活満足度、政治満足度、政治家信頼度

これまでみてきたような、親との投票所体験や家族・友人との会話などの実態に加えて、政治意識と投票行動との間の関係性についても確認してみよう。

〔表16〕は、今回の21年調査で採用したいくつかの政治意識に関する質問の回答と「投票した・しなかった」とのクロス集計結果をまとめたものである。ここで取り上げた政治意識は、「自分自身の生活と政治とはどの程度関係していると思うか」という政治との距離感、「現在の生活にどの程度満足しているか」の生活満足度、「現在の政治に対してどの程度満足しているか」の政治満足度、

表16. 「投票したか」×「政治との距離感」・「生活満足度」・「政治満足度」・「政治家信頼度」（2021年）

	自分の生活と政治との関係の度合い		生活満足度	
	関係している	関係していない	満足	不満足
投票した	84	11	84	12
投票しなかった	81	10	82	8
	政治満足度		政治家信頼度	
	満足	不満足	信頼できる	信頼できない
投票した	41	43	30	64
投票しなかった	49	28	35	48

(%)

そして、「日本の政治家についてどんな印象を持っているか」という政治家信頼度の4項目である(注2)。

政治との距離感や生活満足度については、そもそも「関係している」や「満足」の回答比率が圧倒的なシェアを占めていることもあり、「投票した」－「投票しなかった」間に、ほとんど相違は見受けられない。ただ、政治満足度と政治家信頼度にかんしては、「投票しなかった」人たちにおける「(政治)不満足度」および「(政治家)不信度」が「投票した」人たちに比べて、顕著に低いことが判明する。政治や選挙への関心の高低、言い換えるならば、意図した棄権か・否かは定かではないとしても、「投票しない」というオプションは、政治に対する消極的ないし受動的肯定という脈絡で捉えざるを得ないように思われる。

3. 政治意識の推移

(1) 選挙権・被選挙権年齢

ここからは、16年から21年までの4回の調査結果にみられる、高校生の政治意識の推移をトレースしていきたい。

[表17]参照されたい。2016年の参院選から導入された「18歳選挙権」に関連して、「18歳という年齢で選挙権を持つのは早いと思うか、遅いと思うか」を聞いた結果の経年推移を示している。5割前後の相対的多数を占めていた「ちょうどいい」

表 17. 選挙権年齢は

	早い				ちょうどいい			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	21	20	20	10	49	53	55	67
女性	23	27	26	16	47	44	49	64
1年生	22	24	20	12	50	43	54	65
2年生	25	23	23	16	44	50	53	62
3年生	19	25	26	13	50	51	49	67
全体	22	24	23	13	48	48	52	65
	遅い				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	7	3	5	6	17	23	19	16
女性	2	2	3	3	26	27	22	17
1年生	7	3	5	5	18	30	20	18
2年生	2	2	3	6	26	24	21	17
3年生	3	2	3	3	23	22	21	15
全体	4	2	4	5	22	25	21	16

(%)

の比率が、21年には顕著に増加し65%と大多数を占めるに至った。2割を占めていた「早い」の割合も、21年には1割強に減少している。高校生の認識レベルにおける18歳選挙権の定着が読み取れよう。また、21年の結果は、投票志向の高まりに加えて、「わからない」比率の減少にみられるように、政治的認知の高まりをも示唆している

被選挙権年齢についてはどうだろうか。[表18]に移ろう。選挙権年齢が18歳に引き下げられた一方で、被選挙権には変更がなく、都道府県知事や参議院議員が30歳以上、それ以外が25歳以上のままである。調査では「被選挙権年齢についてどうすべきだと思うか」を聞いた。「今のままでよい」とする消極的な意見が多数を占めているものの、21年には若干減少し、代わりに「引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない」と「選挙権と同じ18歳以上に引き下げるべきだ」がやや増加している。上記の2つの回答を「引き下げ」派として合計すると、16年=30%→17年=27%→19年=32%→21年=38%となり、徐々にではあるが増加傾向にあることが確認できる。

表 18. 被選挙権年齢は

	選挙権と同じ18歳以上にすべきだ				引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	7	6	8	9	26	23	25	30
女性	4	3	4	6	25	24	27	30
1年生	7	4	5	6	25	26	26	27
2年生	4	5	6	9	27	21	25	31
3年生	6	4	6	8	24	23	26	34
全体	5	4	6	8	25	23	26	30
	今のままでよい				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	49	56	51	48	12	15	15	12
女性	53	55	52	49	16	18	16	15
1年生	53	52	55	51	12	18	13	15
2年生	50	57	53	45	16	17	15	15
3年生	51	58	48	46	14	15	19	11
全体	51	55	52	48	14	16	16	14

(%)

(2) 政治満足度、政治家信頼度

次に、政治満足度と政治家信頼度を取り上げてみよう。現在の政治に対してどの程度満足しているかを、4段階の評価で選択してもらった結果を[表19-1]にまとめた。

経年の推移として、「だいたい満足している」の比率が、明らかに上昇傾向にあることがわかる。「大いに満足している」と「だいたい満足している」の合計を「満足」、「やや不満足である」と「大

いに不満足である」の合計を「不満足」とし、「満足」から「不満足」を差し引いた比率を算出したものが、〔表 19-2〕である。16年にはマイナスに振れ、「不満足」が優勢だった高校生による政治評価が、経年とともに変化し、19年には±0に至り、21年にはプラス評価へと反転している。

4回の調査は、すべて、同一の高校を対象に実施しているため、同一集団(コホート)の加齢(正確には、学齢の上昇)による推移を、トレースすることができる。例えば、19年調査における1年生は、21年には3年生に進級している。19年の1年生は差し引き比率が+5、21年の3年生+3となっており、加齢による変化は確認できない。同様に、17年の1年生と19年の3年生、16年の1年生と17年の2年生、16年の2年生と17年の3年生というように同一集団の加齢の軌跡をみても、各コホートに共通する何らかの傾向を読み取ることはできない。

やはり、時勢(時制)的要因の寄与するところが大きいという推測が成り立ち得る。この期間に生じたであろうところの、いかなる時代ないし社会

の変化と、どのようにシンクロしているのだろうか。なお、21年の結果において、1年生と2、3年生との間に、やや顕著な相違が存在していることも気に掛かる。新たな世代の登場という、世代的要因も介在しているのかもしれない。

次は、政治家信頼度をみてみよう。〔表 20-1〕および〔表 20-2〕を参照されたい。過去の調査結果からは、高校生の政治意識の特性として、政治家不信の高さを確認することができた。政治家に対する印象として、「とても信頼できると思う」と「ある程度信頼できる」を合計した「信頼」比率から、「あまり信頼できないと思う」と「全く信頼できないと思う」を合計した「不信」比率を差し引いた値は、〔表 20-2〕にみられるように、16年が-47ポイント、17年が-42ポイントと、極めて高い政治家不信を示していた。先の〔表 19-2〕にみた政治満足度と比較していただきたい。

高校生が政治を認知する起点は、まさに、政治家のネガティブ・イメージにあると推測された。すなわち、「スキャンダルや不祥事など、メディア、とりわけSNSを含む映像メディアを通じた政治家

表 19-1. 政治満足度

	大いに満足している				だいたい満足している				やや不満足である			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	1	3	4	4	25	32	36	38	37	30	26	31
女性	0	2	2	2	25	26	32	41	38	35	32	33
1年生	—	2	3	3	25	26	37	42	39	32	30	30
2年生	0	3	3	3	29	30	33	36	36	28	29	31
3年生	2	2	3	3	21	29	32	39	37	40	28	33
全体	1	2	3	3	25	28	34	39	37	33	29	31

	大いに不満足である				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	11	9	9	6	18	24	24	20
女性	10	6	7	4	25	31	27	20
1年生	10	8	5	4	22	31	25	21
2年生	7	7	8	7	24	32	27	22
3年生	14	7	10	6	20	22	26	17
全体	11	7	8	5	22	28	26	20

(%)

表 19-2. 「政治満足」－「政治不満」
差し引きポイント

	2016	2017	2019	2021
1年生	-24	-11	+5	+10
2年生	-14	-2	-1	+1
3年生	-28	-16	-3	+3
全体	-22	-10	±0	+5

表 20-1. 政治家信頼度

	とても信頼できると思う				ある程度信頼できると思う				あまり信頼できないと思う			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	1	2	3	3	19	24	30	34	51	50	45	44
女性	0	1	1	1	17	18	26	32	57	57	51	50
1年生	1	2	1	2	18	22	31	40	55	51	49	41
2年生	0	1	3	3	20	20	27	29	55	52	49	48
3年生	1	2	2	2	16	20	26	30	53	60	48	51
全体	1	1	2	2	18	21	28	33	54	54	48	46

	全く信頼できないと思う				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
男性	14	12	9	8	8	11	12	10
女性	11	8	7	5	13	16	14	11
1年生	11	9	7	5	11	16	12	12
2年生	9	12	8	8	12	15	13	12
3年生	16	8	10	8	9	10	15	8
全体	12	10	8	7	11	14	13	11

(%)

表 20-2. 「政治家信頼」－「政治家不信」
差し引きポイント

	2016	2017	2019	2021
1年生	-47	-36	-24	-4
2年生	-44	-43	-27	-24
3年生	-52	-46	-30	-27
全体	-47	-42	-26	-18

の姿が、彼らにとってのリアルな政治との遭遇のように思われた」(松本正生、2020、p. 22)。

ところが、マイナスの度合いは、19年には-26ポイントに、さらに21年には-18ポイントへと大きく減少している。試みに、同一コホートにおける加齢の軌跡を確認すると、19年の1年生は-24ポイントから21年の3年生時には-27ポイントに、17年の1年生の-36ポイントは19年の3年生時には-30ポイントへと推移しており、加齢による信頼度ないし不信度の変化を読み取ることはできない。政治不満の減少と同じく、政治不信の減少も、何らかの時勢(時制)的要因が寄与していると推測されよう。

ただ、先の政治満足度と同様に、21年の差し引きポイントを見ると、1年生の値(-4ポイント)と2年生の値(-24ポイント)・3年生(-27ポイント)の間に顕著な相違が存在しており、新たな世代の登場という要素も加わるように思われる。21年の高校1年生に続く世代である現在の中学生たちは、果たしてどのような志向性と政治的感覚を有しているのだろうか。

(3) 政治ニュースの視聴度

ここからは、高校生の情報行動について、「社会や政治のニュース」を視聴するメディアとその頻度を指標に、テレビ、新聞、インターネットの順で見していきたい(注3)。

[表21]は、「テレビで社会や政治のニュースをどの程度見るか」を聞いた結果を示している。

表21. テレビで政治のニュースをどの程度見るか

	毎日見ている			週に2,3回見ている		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	29	31	33	34	33	36
女性	27	29	37	34	34	37
1年生	23	31	34	33	35	36
2年生	26	30	37	32	33	36
3年生	35	29	34	36	32	36
全体	28	30	35	34	34	36
	あまり見ない			全く見ない		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	26	24	22	6	7	7
女性	29	29	20	7	7	5
1年生	32	25	22	8	6	5
2年生	29	26	20	9	7	6
3年生	23	28	21	4	7	7
全体	28	27	21	7	7	6

(%)

経年の推移をみると、「毎日見ている」の比率が17年=28%→19年=30%→21年=35%と、増加傾向を示している。一方、「あまり見ない」の割合が、17年および19年の28%、27%から、21年には21%に減少している。「毎日見ている」+「週に2,3回見ている」=「見る」と「あまり見ない」+「全く見ない」=「見ない」の値を比較すると、17年:62%(「見る」)-35%(「見ない」、以下同じ)、19年:64%-34%から、21年には71%-27%へと、その差が広がっている。21年の値には学年間での相違も存在しないことから、コロナ禍による何らかの影響が推測される。新聞で社会や政治のニュースを読む度合いにかんしては、[表22]にまとめた。テレビとは異なり、新聞にかんしては、経年の推移、および、21年における度合い、ともに増加傾向は確認できない。「毎日読んでいる」+「週に2,3回読んでいる」=「読む」比率と、「あまり読まない」+「全く読まない」=「読まない」比率との大小関係は、17年:8%(「読む」)-88%(「読まない」以下同じ)、19年:8%-87%、21年:10%-87%となり、高校生の新聞離れに変化は見受けられない。

表22. 新聞で社会や政治の記事を読むか

	毎日読んでいる			週に2,3回読んでいる		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	4	3	4	8	8	8
女性	0	2	2	4	4	7
1年生	2	3	2	5	6	8
2年生	1	2	4	5	6	7
3年生	2	3	3	8	5	7
全体	2	2	3	6	6	7
	あまり読まない			全く読まない		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	26	28	28	57	54	57
女性	23	28	26	69	63	63
1年生	22	28	28	66	59	59
2年生	25	28	28	64	60	59
3年生	26	27	25	62	59	61
全体	24	28	27	64	59	60

(%)

続いて、インターネットで社会や政治のニュースを見る度合いの推移を確認してみよう。[表23]を参照されたい。「毎日見ている」、および「週に2,3回見ている」ともに、明確な増加傾向を示している。「見ない」については、「あまり」ではなく「全く」の方が顕著に減少している。「毎日見る」

表 23. インターネットで社会や政治のニュースを見るか

	毎日見ている			週に2,3回見ている		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	12	14	18	25	30	32
女性	4	9	12	19	25	29
1年生	5	10	13	18	26	30
2年生	5	12	17	21	27	31
3年生	12	12	16	26	28	32
全体	7	11	15	21	27	31
	あまり見ない			全く見ない		
	2017	2019	2021	2017	2019	2021
男性	35	34	34	25	17	14
女性	39	43	40	36	21	16
1年生	40	39	38	33	21	16
2年生	38	39	35	34	19	15
3年生	34	38	38	26	17	13
全体	37	39	37	31	19	15

(%)

+「週に2,3回見る」=「見る」と「あまり見ない」
 +「全く見ない」=「見ない」の比率を比較すると、
 17年:28%(「見る」)-68%(「見ない」、以下同じ)
 →19年:38%-58%→21年:46%-52%と推移している。

なお、テレビ、インターネットともに度合いの増加がみられるものの、テレビにかんしては21年の単年度における増加、インターネットについては経年の直線的な増加傾向という相違が存在する。

4. 政治的社会的位相

(1) 時勢と加齢

先にも述べたように、4回の調査は、同じ高校生を対象としているため、同一集団の加齢による意識の推移をトレースすることが可能になる。いわゆるコホート分析にほかならない。

ここでは、「友人と政治の話をする頻度」、「家族と政治の話をする頻度」、「日本の政治を動かしているのはだれか」の3つを指標に、高校生の政治的社会的位相を考察してみたい。

まず、「友人との政治の話」についてまとめた〔表24-1〕と〔表24-2〕を参照されたい。友人と政治の話をする度合いは、〔表24-1〕に明らかなように、低い値で推移している。ただ、「ある」の割合は、「ときどきある」にみられるように、やや増加傾向を、「ない」の比率は「ほとんどない」にみら

表 24-1. 友人と政治の話をするか

	よくある				ときどきある			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	3	3	3	3	13	8	12	17
2年生	2	3	3	4	15	16	13	17
3年生	1	3	4	5	17	25	14	23
全体	2	3	3	4	15	16	13	19
	あまりない				ほとんどない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	24	28	28	32	55	60	57	47
2年生	25	27	28	33	50	54	56	46
3年生	26	30	27	35	50	41	54	36
全体	25	28	28	34	52	52	56	43

(%)

表 24-2. 友人と政治の話をするか〔コホート〕

	ある(よく+ときどき)				ない(あまり+ほとんど)			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	16	11	15	20	79	88	85	79
2年生	17	19	16	21	75	81	84	79
3年生	18	28	18	28	76	71	81	71
全体	17	19	16	23	77	80	84	77

(%)

れるように減少傾向を、それぞれ確認することができる。

〔表24-2〕で、その詳細を観察してみよう。19年の1年生は21年の3年生に相当する。当該コホートは、1年次から3年次へと学年が上がることで、「よくある」+「ときどきある」の「ある」比率が15%から28%へと増加し、「あまりない」+「ほとんどない」の「ない」比率が85%から71%に減少しており、加齢効果を読み取ることができる。同じように、17年の1年次の「ある」=11%は19年の3年次には18%に、16年の1年次の16%は17年の2年次には19%に、2年次の17%は3年次には28%へと、それぞれ加齢による上昇を確認することができる。ただ、21年結果における、1年生・2年生を含めた全年次での比率の増加を考え合わせると、友人との政治の話については、加齢効果のみならず、時勢(時勢)要因も介在していると推測される。

「家族との政治の話」は、〔表25-1〕および〔表25-2〕にまとめた。経年の推移については、「ある」の斬増、「ない」の斬減傾向が読み取れる。コホートを確認すると、19年の1年次は21年の3年次

に「よくある」+「ときどきある」の「ある」の割合が42%から58%に増加している。16年の1年次の42%は17年の2年次に50%へ、2年次の46%は3年次の58%に上昇しており、友人との話同様に加齢効果が読み取れる。19年から21年への経年の推移を勘案すると、加齢要素の寄与度が大きいものの、時勢(時制)の要素の介在も推測されよう。

表 25-1. 家族と政治の話をするか

	よくある				ときどきある			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	7	10	8	11	35	37	34	42
2年生	5	11	8	14	41	39	35	42
3年生	10	12	9	14	38	46	35	44
全体	7	11	9	13	38	40	35	43

	あまりない				ほとんどない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	26	24	29	26	26	29	29	20
2年生	23	24	28	25	25	26	28	18
3年生	22	25	26	25	23	17	29	16
全体	24	24	27	25	25	24	29	18

(%)

表 25-2. 家族と政治の話をするか〔コホート〕

	ある(よく+ときどき)				ない(あまり+ほとんど)			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	42	47	42	53	52	53	58	46
2年生	46	50	43	56	48	50	56	43
3年生	48	58	44	58	45	42	55	41
全体	45	51	44	56	49	48	56	43

(%)

(2) コホート比較

最後は、「日本の政治を動かしているのは誰だと思うか」という、政治主体に関する認識を取り上げよう。〔表 26-1〕を参照されたい。経年の推移をみると、「国会議員」の比率が一貫して最も高い中で、「官僚」の割合が徐々に増加している。また、「首相」比率には、16、17年の16~17%と21年の10%という相違が見受けられる。安倍氏から菅・岸田氏への交代が関わっていると考えられる。さらに、19年と21年の間で、「国会議員」が22%から29%に増加し、「国民一人一人」が18%から15%に減少するという相反傾向が存在している。先に

表 26-1. 日本の政治を動かしているのはだれか

	国会議員				官僚				首相			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	23	20	21	27	9	12	12	14	14	15	14	12
2年生	24	19	23	31	8	11	13	14	15	16	15	10
3年生	20	21	22	26	8	9	14	25	18	22	12	9
全体	22	20	22	28	8	11	13	17	16	17	13	10

	国民一人一人				マスコミ				わからない			
	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021	2016	2017	2019	2021
1年生	25	20	21	19	8	10	12	11	14	17	12	13
2年生	18	18	18	15	12	14	12	12	15	16	13	10
3年生	13	12	14	10	10	19	14	14	18	12	16	11
全体	18	17	18	15	10	14	13	12	16	15	14	11

(%)

みた、21年における「投票した」比率の上昇や、投票志向(「投票に行く」)の増加にもかかわらず、「国民一人一人」の比率は減少している。政治主体に関する認識というのは、投票行動や投票意欲とは次元の異なる問題なのだろうか。

話題を〔表 26-2〕のコホートに転じたい。政治主体のうち、「国民一人一人」に焦点をしばっている。19年の1年生は21年に3年生に学年が上がることにより、「国民一人一人」を選択する比率が21%から10%へと減少している。同様に、17年の1年生は19年には3年生となることで、20%から14%に減少し、16年の1年生は17年に2年生に上がり25%から18%に、16年の2年生は17年に3年生になると18%から12%へと、それぞれ比率を減少させている。学年の階段を上がるごとに、ほぼ等分に比率が減少していくという、明確な加齢効果、より正確に表現するならば、逆年功効果が続いている。しかも、政治満足度や政治家信頼度とは異なり、時勢(時制)の影響は小さい。

高校生たちは高校生生活の過程で、「一票のリアリティ」の消失という政治的社会的なことを繰り返しているのかもしれない。何故なのだろうか。

表 26-2. 日本の政治を動かしているのはだれか〔コホート〕

	国民一人一人			
	2016	2017	2019	2021
1年生	25	20	21	19
2年生	18	18	18	15
3年生	13	12	14	10
全体	18	17	18	15

(%)

まとめにかえて

ここまで、21年総選挙の直後に実施した、「第4回さいたま市高校生政治意識調査」の結果に基づき、コロナ禍の選挙に高校生たちはどのように対応したのかを確認してきた。16年から21年まで、4回の調査結果を概観すると、「政治満足度」や「政治家信頼度」のように、不満や不信の度合いが年とともに減少し、高校生にみられた政治不満や政治家不信が解消しつつあることが確認された。加えて、21年時の高校1年生については、新たな世代の登場を示唆する兆候も見受けられた。

他方、21年調査の結果には、19年までの過去3回の調査結果とは異なる、反転傾向が存在した。すなわち、16年から19年までの経年傾向は、高校生の政治関心や政治参加における退出傾向を示していたが、21年調査の結果は、「投票率」の上昇に象徴されるように、投票志向や政治関心の高まりを示していた。それらの傾向は、有権者高校生だけでなく、非有権者高校生、言い換えるならば、未来の有権者にも該当した。

2020年来続く「コロナ禍社会」での生活を余儀なくされることで、高校生たちの態度や行動様式が、地に足がついてきたということは、疑う余地はないだろう。コロナという不可抗力現象に遭遇したことが、高校生の政治的社会化にどのようなインパクトをもたらすのか。今後も継続して調査を実施していきたい。

(埼玉大学社会調査研究センター)

(注)

注1) 2021年調査を除く過去3回の「さいたま市高校生政治意識調査」の詳細は以下の通りである。2019年調査は、19年9月、さいたま市の市立高等学校4校(浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校、大宮西高等学校)の全校生徒(1~3年生)を対象に実施し、回答者総数2,962名であった。2017年調査は、同じくさいたま市の市立高等学校4校の1~3年生を対象に、17年10月に実施し、回答者数は1,341名であった。2016年調査は、同様に、さいたま市の市立高等学校4校の1~3年生を対象として16年7月に実施し、回答者数は948名であった。4回の調査は、いずれも、クラス単位で調査票を配付し回収する集合調査法を採用した。なお、大宮西高等学校にかんしては、2020年3月に閉

校となったため、2021年調査の対象校には入っていない。

調査の実施に際しては、さいたま市教育委員会のご協力を頂戴した。対象となった各学校の関係者のみなさま、とりわけ、タイトな授業日程にもかかわらず、無理なお願いを聞き入れてくださった各高校の校長先生には、深く感謝する次第である。あわせて、回答してくれた高校生にも御礼を申し述べたい。

注2) ここで採用した4つの質問に対する21年の回答結果は、それぞれ以下の通りである。「自分自身の生活と政治との関係の度合い」では、「関係している(非常に関係している+ある程度関係している)」=83%、「関係していない(あまり関係していない+全く関係していない)」=11%、「生活満足度」は、「満足(大いに満足している+だいたい満足している)」=83%、「不満足(やや不満足である+大いに不満足である)」=12%、「政治満足度」は、「満足(大いに満足している+だいたい満足している)」=43%、「不満足(やや不満足である+大いに不満足である)」=39%、「政治家信頼度」が「信頼できる(とても信頼できると思う+ある程度信頼できると思う)」=31%、「信頼できない(あまり信頼できないと思う+全く信頼できないと思う)」=59%であった。

注3) 16年調査と17年以降の調査とでは、選択肢のワードにかんして、「1. ほぼ毎日見て(読んで)いる」(16年)と「1. 毎日見て(読んで)いる」(17年以降)の、さらに、「2. 週に1回以上見て(読んで)いる」(16年)と「2. 週に2,3回見て(読んで)いる」(17年以降)の相違が存在する。したがって、ここでは、17年以降の結果を採用した。

(参考文献・資料)

- 松本正生 (2016) 「18歳選挙権と『選挙ばなれ社会』—さいたま市高校生政治意識調査から—」『政策と調査』第10号, 2016. 2
- 松本正生 (2017) 「子どもから大人へ、政治意識と社会化環境—中学生・高校生・有権者調査—」『政策と調査』第12号, 2017. 3
- 松本正生 (2018) 「『18歳選挙権』、参院選(2016)~衆院選(2017)へ—高校生政治意識調査から—」『政策と調査』第14号, 2018. 3
- 松本正生 (2020) 「『不満もなく、関心もなく』、政治を意識しない若者たち—高校生政治意識調査(2016・17・19)から—」『政策と調査』第18号, 2020. 3

「高校生の選挙・政治に関する意識調査」2021年11月

埼玉大学社会調査研究センターでは、さいたま市教育委員会の協力により、さいたま市の市立高等学校3校（浦和高等学校、浦和南高等学校、大宮北高等学校）に在籍する1～3年生のみなさんを対象に、選挙や政治に関する意識調査を実施することになりました。みなさんのプライバシーに配慮し、回答結果は統計的に処理します。

お名前は記入しないようにお願いします。

この下の Q1 からお答えください

Q1. あなたは、今年の11月1日の時点で「満18歳」になっていましたか。番号に○をつけてください。

- 1. なっていた 19%
- 2. なっていません(Q1 Eに進んで下さい) 81%

「1. なっていた」と回答した人への質問

Q1 A. あなたは、10月31日に実施された衆議院議員選挙で投票しましたか。番号に○をつけてください。

- 1. 投票した 73%
- 2. 投票しなかった (Q1 Fに進んでください) 26%

「1. 投票した」と回答した人への質問

Q1 B. 投票日当日に投票しましたか、それとも期日前投票（または不在者投票）をしましたか。番号に○をつけてください。

- 1. 当日投票をした 88%
- 2. 期日前投票（不在者投票）をした 12%

Q1 C. あなたは、どなたと投票に行きましたか。1つ選んで番号に○をつけてください。

- 1. 1人で 18%
- 2. 家族と 80%
- 3. その他（具体的に： ） 2%

Q1 D. あなたは、小選挙区の立候補者の中で誰を選ぶか決める時、候補者の所属する政党を重視して投票しましたか。それとも候補者個人を重視して投票しましたか。1つ選んで番号に○をつけてください。

- 1. 政党を重視して 45%
- 2. 候補者個人を重視して 38%
- 3. どちらともいえない 13%
- 4. わからない 3%

「2. なっていません」と回答した人への質問

Q1 E. あなたは、18歳になったら選挙の投票に行きますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

- 1. 行く 64%
 - 2. 行かない 3%
 - 3. わからない 32%
- } (次のページのQ3に進んでください)

「2. 投票しなかった」と回答した人への質問

Q1 F. あなたが投票しなかったのは、なぜですか。あてはまるものを2つまで選んで、番号に○をつけてください。

- 1. 他の用事（勉強や部活など）があったから 67%
- 2. 病気や体調が良くなかったから 7%
- 3. 投票所が遠かったから 1%
- 4. 面倒（めんどう）だったから 11%
- 5. 選挙に関心がなかったから 7%
- 6. 誰を（どの政党）を選んでいいのかよくわからなかったから 20%
- 7. 自分一人が投票しても意味がないから 4%
- 8. その他（ ） 6%

次のページの Q2に進んでください

Q2. あなたは、今年の5月24日の時点で「満18歳」になっていましたか。番号に○をつけてください。

1. なっていた 6%
2. なっていなかった(Q3に進んで下さい) 14%

「1. なっていた」と回答した人への質問

Q2A. あなたは、5月23日に実施されたさいたま市長選挙で投票しましたか。番号に○をつけてください。

1. 投票した 32%
2. 投票しなかった 27%
3. さいたま市以外に住んでいる 42%

ここからは全員への質問です

Q3. 今回の衆議院議員選挙で、あなたが見たり聞いたりしたものが下の中にありますか。あればすべて選んで番号に○をつけてください。

1. 「選挙公報」 31%
2. 候補者や政党の新聞広告 23%
3. 政党のテレビCM (コマーシャル) 42%
4. 新聞やテレビの選挙報道番組 53%
5. 選挙管理委員会のホームページ 5%
6. 政党や政治家のホームページ 8%
7. LINE や Twitter (ツイッター) などの SNS 25%
8. You Tube などの動画サイト 17%
9. 掲示板にはられた候補者や政党のポスター 61%
10. 候補者や政党による駅や街頭での演説 56%
11. 候補者や政党のビラやパンフレット 24%
12. インターネットのポータルマッチ 4%
13. 選挙カーの連呼運動 65%
14. どれも見たり聞いたりしなかった 3%

Q4. あなたは、高校生が政治や選挙に関心を持つためには、何をすればよいと思いますか。あてはまるものを2つまで選んで番号に○をつけてください。

1. 学校で政治や選挙に関する新聞記事を使った授業を受ける 33%
2. 学校で政治や選挙に関する話し合いやディベートを行う 34%
3. 議員や政党の関係者に来てもらって政治の話聞く 28%
4. 学校で選挙管理委員会の職員などから選挙の話の聞いたり、模擬選挙を体験する 24%
5. 選挙時に、投票所で受付などの事務を体験したり、街頭で投票への参加を呼びかける啓発キャンペーンに参加する 10%
6. 開会中の議会を傍聴に行く 21%
7. 本物の議場で生徒が市長に質問したり提案を行う高校生議会を開催する 11%
8. その他 () 4%

Q5. あなたは、どのような環境であれば投票しやすいと思いますか。あてはまるものを2つまで選んで番号に○をつけてください。

1. 自分の通う学校で投票できる 53%
2. 自分がよく行く施設や店で投票できる 26%
3. 自分が住んでいる所だけでなく、全国どこの投票所でも投票できる 11%
4. 朝早くから深夜まで投票できる 15%
5. 郵便で投票できる 9%
6. スマートフォンやパソコンから投票できる 64%
7. その他 () 0%

Q6. 「選挙権」が認められるのは満18歳からです。18歳という年齢で選挙権を持つのは早いと思いますか。それとも遅いと思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 早い 13%
2. ちょうどいい 65%
3. 遅い 5%
4. わからない 16%

次に右上の Q7 に進んでください

Q7. 一方、選挙に立候補できる「被選挙権」は、都道府県知事と参議院議員では30歳以上、それ以外では25歳以上となっています。あなたは、被選挙権についてどうすべきだと思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 選挙権と同じ18歳以上にすべきだ 8%
2. 引き下げるべきだが、選挙権と同じ年齢まで引き下げる必要はない 30%
3. 今のままでよい 48%
4. わからない 14%

Q8. あなたは、子どものころ、親といっしょに投票所に行ったことがありますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. ある 52%
2. ない 36%
3. わからない 11%

Q9. あなたは、国の政治にどの程度関心がありますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 非常に関心がある 8%
2. ある程度関心がある 56%
3. あまり関心がない 27%
4. 全く関心がない 4%
5. わからない 4%

Q10. あなたは、自分自身の生活と政治とはどの程度関係していると思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 非常に関係している 26%
2. ある程度関係している 54%
3. あまり関係していない 12%
4. 全く関係していない 1%
5. わからない 6%

Q11. あなたは、現在の生活にどの程度満足していますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 大いに満足している 15%
2. だいたい満足している 68%
3. やや不満足である 10%
4. 大いに不満足である 1%
5. わからない 5%

Q12. あなたは、現在の政治に対してどの程度満足していますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 大いに満足している 3%
2. だいたい満足している 39%
3. やや不満足である 39%
4. 大いに不満足である 5%
5. わからない 20%

Q13. 日本の政治家（国会議員、地方議員、首長など）を考えた時、あなたは、政治家についてどんな印象を持っていますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. とても信頼できると思う 2%
2. ある程度信頼できると思う 33%
3. あまり信頼できないと思う 46%
4. 全く信頼できないと思う 7%
5. わからない 11%

Q14. あなたは、日本の将来はどのようになると思いますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 良くなると思う 7%
2. あまり変わらないと思う 58%
3. 悪くなると思う 22%
4. わからない 12%

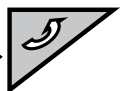
Q15. あなたは、家族と政治の話をすることがありますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. よくある 13%
2. ときどきある 43%
3. あまりない 25%
4. ほとんどない 18%

Q16. あなたは、友人と政治の話をすることがありますか。1つ選んで番号に○をつけてください。

1. よくある 4%
2. ときどきある 19%
3. あまりない 34%
4. ほとんどない 43%

次のページの Q17 に進んでください



Q17. 今の日本の政治を実際に動かしているのは誰だと思いますか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 国会議員 28%
2. 官僚 17%
3. 首相 10%
4. 国民一人一人 15%
5. 大企業 4%
6. マスコミ 12%
7. その他 () 1%
8. わからない 11%

Q18. 新型コロナウイルスの感染がここまで拡大したことについて、あなたの考えに近いものを1つ選んで番号に○をつけてください。

1. 行政の責任が重い 25%
2. 感染対策を守らない人たちが悪い 41%
3. 新しいウイルスなので仕方ない 34%

Q19. あなたは、テレビ、新聞、インターネットで、社会や政治のニュースをどの程度見たり、読んだりしますか。
それぞれ1つ選んで番号に○をつけてください。

A. テレビで社会や政治のニュースを見る

1. 毎日見ている 35%
2. 週に2、3回見ている 36%
3. あまり見ない 21%
4. 全く見ない 6%
5. わからない 2%

B. 新聞で社会や政治の記事を読む

1. 毎日読んでいる 3%
2. 週に2、3回読んでいる 7%
3. あまり読まない 27%
4. 全く読まない 60%
5. わからない 3%

C. インターネットで社会や政治のニュースを見る

1. 毎日見ている 15%
2. 週に2、3回見ている 31%
3. あまり見ない 37%
4. 全く見ない 15%
5. わからない 2%

Q20. あなたが自分の携帯やタブレットで、社会や政治のニュースの情報源としてよく利用するのはどれですか。
1つ選んで番号に○をつけてください。

1. Twitter 23%
2. LINE ニュース 28%
3. Youtube 内のニュース動画 8%
4. ニュースアプリ 25%
(Yahoo!ニュース、スマートニュース、グノシーなど)
5. 新聞社の動画ニュースサイト 2%
(各社のサイトやNewsVideo など)
6. テレビ局の動画ニュースサイト 4%
7. 動画サービス (Hulu、Gyao! など) 0%
8. その他 () 2%

Q21. 上の1~8の中で、あなたが信頼する情報源はどれですか。
すべて選んで番号に○をつけてください。

1. Twitter 11%
2. LINE ニュース 26%
3. Youtube 内のニュース動画 11%
4. ニュースアプリ 44%
(Yahoo!ニュース、スマートニュース、グノシーなど)
5. 新聞社の動画ニュースサイト 23%
(各社のサイトやNewsVideo など)
6. テレビ局の動画ニュースサイト 27%
7. 動画サービス (Hulu、Gyao! など) 2%
8. その他 () 6%

F1. あなたは男性ですか、女性ですか。

1. 男性 49%
2. 女性 48%
3. 答えない 2%

F2. あなたは何年生ですか。

1. 1年生 35%
2. 2年生 33%
3. 3年生 32%

F3. あなたはさいたま市に住んで何年になりますか。

1. 生まれてからずっと 37%
2. 10年以上 18%
3. 3~9年 6%
4. 2年以内 1%
5. さいたま市以外に住んでいる 38%

これで質問は終了です。
回答どうもありがとうございました。

お問い合わせ
埼玉大学社会調査研究センター 担当: 菱山(ひしやま)
TEL: 048-858-3120 Email: ssrc@gr.saitama-u.ac.jp